

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：32677

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520347

研究課題名(和文)ジャンセニスムとポール・ロワヤル：論争と霊性(1640-1662)

研究課題名(英文)Jansenism and Port-Royal: Polemics and Spirituality (1640-1662)

研究代表者

望月 ゆか (Mochizuki, Yuka)

武蔵大学・人文学部・教授

研究者番号：30350226

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：1643年以降のいわゆるジャンセニスム論争が『アウグスティヌス』の恩寵論を中心に展開されたのとは対照的に、1643年以前の黎明期ポール・ロワヤルの思想は、道德=悔悛(『頻繁な聖体拝領』、信仰=恩寵(『イエス・キリストへの信仰の必要性』、愛徳(対シルモン論争および愛に関する未刊の著作)、さらに水面下での痛悔論争を含んだ四分野が有機的に連関する形で展開された。後に、黎明期ポール・ロワヤルとジャンセニスムはパスカルにおいて総合される。たとえば『第五プロヴァンシアル』で行っている道德と恩寵との必然的関連の指摘はその一例である。

研究成果の概要(英文)：Contrary to the so-called Jansenism controversies which would focus on the defense of the theory of grace affirmed in the Augustinus of Jansenius, the first movement of Port-Royal directed by Saint-Cyran until his death in 1643 developed a series of themes that together form quite an organic unity. The works of the young Antoine Arnauld concerned morality and penitence (De la Frequente Communion); faith and grace (De la necessite de la foi en Jesus-Christ pour etre sauve); charity (anti-Sirmond polemics and a related book which would remain unpublished); and also, implicitly, the important topic of attritionism and contritionism. The first Port-Royal and Jansenism would later achieve a synthesis in Pascal, for example in the remarks of the Fifth Provinciale on the necessary relation between laxity and Molinist grace.

研究分野：フランス文学

科研費の分科・細目：フランス文学

キーワード：ポール・ロワヤル アルノー サン・シラン 『頻繁な聖体拝領』 パスカル 『プロヴァンシアル』

1. 研究開始当初の背景

フランスにおけるジャンセニスム論争を引き起こしたのは、1642年末～1643年初頭のアベルによるジャンセニウス『アウグスティヌス』連続弾劾説教である。オルシバルは、ジャンセニウスとその盟友で1635年から1643年の死に至るまで黎明期ポール・ロワヤルを導いたサン・シランの二人を対立的に捉え、アウグスティヌス主義という共通の土台をもつものの、後者の思想は、異端とされた前者の五命題とは必ずしも合致せず、カトリック宗教改革正統の流れに属すると唱えた。例えば、サン・シラン指導の下、若きアルノーが著した『頻繁な聖体拝領』(1643年出版)は「門をたたけ、そうすれば開かれる」という聖句を引用するが、これは恩寵下にある人間意志の主体性を強調するもので、恩寵の絶対的先行性をもっぱら唱えたジャンセニウスとは力点が異なる。我々は黎明期ポール・ロワヤルと1643年以降のフランス・ジャンセニスムとの相関性について、基本的にオルシバルの見解に沿いながら、霊性及び文体、読者層に関する比較分析を進めてきた。第一に、黎明期に信仰(=『イエス・キリストへの信仰の必要性』)・悔悛(=『頻繁』)・愛についての三部作構想があったこと、愛の著作は1643年ジャンセニスム論争開始とともに放棄されたことを指摘した。第二に、アルノーにおいては、初期の作品のみにサン・シラン的単純崇高文体(『頻繁』)やフランス霊性学派ペリュールのキリスト論の影響(『イエス・キリストへの信仰への必要性』、1641年執筆、1701年死後出版)が存在することを確認し、黎明期ポール・ロワヤルとジャンセニスムとの間に一種の断絶があったことの傍証とした。しかし、単純文体、ペリュールの影響の両者はその後パスカルにおいて再登場する。ここから、1643年以前・以後の思想、つまり黎明期ポール・ロワヤルとジャンセニスムがパスカルにおいて総合されているのではないかと仮定した。

2. 研究の目的

本研究は以下の二点を主たる目的とする。第一に、黎明期ポール・ロワヤルとジャンセニスムに関するこれまでの研究を一步進め、両者の傾向性の違いだけでなく、オルシバルが注目してこなかった道德論(悔悛論)と恩寵論との積極的関連性についても考察を行うこと、第二に、フランス本国でも未だまとまった研究のない、黎明期ポール・ロワヤル(サン・シラン)の活動と思想の全貌を解明することである。

(1)黎明期ポール・ロワヤル三部作の生成過程の解明: 三部作全体の生成過程; 特に、唯一出版計画が放棄されなかった『頻繁』の詳しい生成過程。

(2)三部作(信仰・悔悛・愛)の霊性の解明: 失われた「愛」の著作の内容的同定; 愛と

悔悛の二テーマにまたがる完全悔悛・不完全悔悛論争の背景的理解。

(3)黎明期ポール・ロワヤル三部作とパスカルの比較: 『恩寵文書』との比較; 『パンセ』等のキリスト論との比較; 恩寵と道德との直接的関係を述べた『第五プロヴァンシアル』との関連; 悔悛に関する『第十プロヴァンシアル』との比較。

3. 研究の方法

文献研究を基本とする本研究の方法論的特徴は、(1)同時代の書簡を参照した、作品の詳しい生成過程の解明;(2)同時代のポール・ロワヤル及び論敵の作品との綿密な比較研究の二点である。対象作品の内在的読解と外在的資料の読解を組み合わせ、生成過程に注目することで、主要な作品を通読しただけでは気付かない隠れた論争の射程や戦略を浮き彫りにし、フランス本国のポール・ロワヤル及びジャンセニスム研究への寄与が可能となる。科研費によるパリ図書館(フランス国立図書館、ポール・ロワヤル図書館、マザリーヌ図書館等)での文献調査を年に一度行った。研究成果の発表言語は原則的にフランス語による。

4. 研究成果

(1)『頻繁』執筆の直接的契機となったゲメネ公爵夫人の回心とイエズス会セメゾン神父の『聖体拝領は稀よりも頻繁の方が良いか』について分析した。まず、アンジェリク尼修道院長書簡集及びサン・シラン書簡集に基づき、レ枢機卿やサント・ブーヴに由来する公爵夫人への従来の偏見を正し、その回心の深さ、初代教会への造詣を明らかにした(論文)。セメゾンの著作は、公爵夫人の説得とサン・シランへの論争的意図を併せもつ両義的な性格だが、イエズス会側が手稿状態の弾劾文書流布という定石手段に訴えなかったのは、ポール・ロワヤルの悔悛が公爵夫人だけでなく社交界に流行することを真剣に恐れた証左である。「ポール・ロワヤルと女性読者」は1643年以降の論争の文学的トポスの一つであるが、その発端をゲメネ夫人の回心と『頻繁』への初期の論駁文書に見出すことができる。

(2)セメゾン神父の著作をその主たる源泉であるカルトジオ会士モリナの著作と比較研究した。セメゾンは『頻繁』の続編である『教会の伝統』(1644)以来はモリナも含め、弛緩主義道德主義と単純に理解されてきたが、両者の作品には、より堅固な信心への奨励など弛緩主義に収まりきらない要素が散見される。弛緩主義と規範主義の併存は、ゲメネ公爵夫人の回心が決定的なものか確信できなかったイエズス会の立場を反映させたものと当初は解釈したが(論文)、『プロヴァンシアル』で弛緩主義の権化とみなさ

れたイエズス会士ボオニー神父にも、非常に逆説的だが同様の規範主義が見られることを後に発見し、軌道修正を行った(以下(6)、偽完全痛悔主義についての研究参照)。

(3)ポール・ロワヤルの恩寵論と悔悛論との関係を、黎明期ポール・ロワヤルという時代的枠組みにおいて考察すると、オルシバルが注目しなかった積極的関連性が見いだせる。両者の間にはたしかにニュアンスの違いがある。第一に、「怖れ」に関し、義人の堅忍可能性を問題とする恩寵論では未来に焦点が当てられているのに対し、悔悛論では聖体拝領をするために十分義人であるか否かが問われており、現在の時点が問題となっている。第二に、悔悛論では恩寵論の出発点となる原罪の教義そのものに触れられていないばかりか、神の恩寵の先行的無償性よりも、むしろ、それによって神の赦しに至る悔悛の業の功績が強調されている(恩寵論に対し、ギリシア教父の引用の多さも目立つ)。全体として、恩寵論では人間に対する神の超越性に力点が置かれるのに対し、悔悛論では神に近づく人間の聖性が全面に出される。これは、神の憐れみに過度の信頼を置く当時の安易な聖体授受の潮流に対するアンチテーゼとして、罪に見合った悔悛を通し真の回心に至った者のみが、神の憐れみに全面的信頼を寄せることができるという主張で、ペラギウス主義やモリニズムの枠組みとは無縁である。他方、恩寵論と悔悛論に共通の理論的枠組みは、『イエス・キリストへの信仰の必要性』で展開されたキリスト論に求められる。この著作は執筆 60 年後に死後出版されたため、黎明期の代表作である『頻繁』との関連が問われてこなかった。霊的癒しは恩寵論ではキリスト自身の無化にあったが、悔悛論では初代教会式の悔悛(キリストの代理である司祭によって課される)である。悔悛者への赦免の延期は霊的謙遜をはぐくむ点で、恩寵論における義人の一時的遺棄に対応する。アウグスティヌスは、過酷な悔悛に服すことを十字架のキリストの苦しみに重ね、ギリシア教父には見られなかった恩寵論と悔悛論との霊的連結を可能にした(論文)。

(4)恩寵と悔悛との関連について、『第五プロヴァンシアル』では、弛緩主義的道德から直接にモリニズムの恩寵論が帰結されると述べられている。ストア派禁欲思想と親近性の強いモリニズムからなぜ弛緩主義が生まれるのか、とくに『プロヴァンシアル』以来ジャンセニスム論争ではモリニズムと弛緩主義が同列に論じられることが多いが、両者の異質性は従来問われることがなかった。この問題について三段階の考察を行った。まず、『必要』に見られるポール・ロワヤルのキリスト論(葉師キリストとキリストの謙遜)から、弛緩主義及びストア・モリニズムの高慢に対する二重の批判が必然的に導かれる(論文)。次いで、この問題を篤信 *dévotion* の観点より考察した。万人を完徳に誘うカトリ

ック宗教改革の流れとストア的モリニズムのエリート主義の間のジレンマは、エリート信徒と大衆信徒の霊性にダブルスタンダードの基準を固定化した(義務と勸奨の区別)に対するポール・ロワヤルでは、全信徒がキリスト修道会の弟子たるべきであると『頻繁』が述べるように、厳格かつ一元的な道德主義を謳う。この一元的完徳は、フランソワ・ド・サルルの霊性に属し、17 世紀前半から中葉にかけてのフランス一般信徒の霊性史の観点からも重要である(学会発表)。ところで、当時の主流だったダブルスタンダード的篤信論の神学的根拠はドゥンス・スコトゥスに端を発する不完全痛悔主義に求められる(学会発表)。

(5)ジャンセニウスは厳格な完全痛悔主義に立ち、ポール・ロワヤルも後にリゴリズム(道德厳格主義)と完全痛悔主義の牙城となる。しかし、黎明期ポール・ロワヤルと完全痛悔主義の関係は曖昧である。サン・シランがある時は不完全痛悔主義を容認し、ある時は強硬な完全痛悔主義を主張したためである。伝記作者たちを悩ませてきたこの矛盾をラポルトは神学理論と司牧実践の区別から、オルシバルは偉大な霊的作家の霊的止揚から説明しようとした。しかし、サン・シランの一見相容れない主張は、実は不完全痛悔主義の歴史的変遷に呼応している。その実現可能性は度外視しつつも、神の愛に基づく完全痛悔へと信徒を鼓舞し、他方、臨終の際には完全痛悔を要求する穏健な不完全痛悔主義は、「蓋然的」思想の範囲に属し、容認可能だった。しかし、1641 年以降、ルーヴァンのイエズス会神学博士論文やシルモン神父の『美德礼讃』が、完全痛悔や神への愛を信徒の障害と見なすと、サン・シランは過激化した不完全痛悔主義からキリスト教の本質を守るため、断固たる完全痛悔主義者に变身するのである(学会発表)。

(6)サン・シランが当初完全痛悔主義を取らなかったもう一つの理由は、偽完全痛悔主義と報告者が名付ける当時の一潮流への彼独特の注目があったためである。偽完全痛悔主義は完全痛悔を義務とするので、一見、規範主義的印象を与えるが、実際には道德弛緩主義である。たとえば、告解の場で罪の痛悔が不十分であっても、その不十分さを悔いることが完全痛悔とみなされ、形ばかりの「完全痛悔の祈り」を唱えれば、悔悛の秘蹟の恩寵を受け、聖化されるに十分であるとされる。この思想は地獄への怖れを信徒に要求しないため、穏健な不完全痛悔主義よりも道德的弊害が大きい。『頻繁』が直接・間接に問題とするカルトジオ会士モリナとイエズス会良心例学者ボオニーをつなぐのが、「完全痛悔の祈り」を扱う第 2 部第 12 章である。『頻繁』の第一稿は、ボオニーに関する章を含む聖カルロ・ボロメオの悔悛論に関する論考であることも考え合わせると、痛悔論は『頻繁』の主題から除外されるとした従来の見解は

修正すべきである。痛悔論に関するサン・シランの思想的変遷と併せ、今後より深める必要がある(学会発表)。ちなみに1644年にジャン＝ピエール・カミュは、『頻繁』論争の真の主題は痛悔論であると断じている。

(7)サン・シランは晩年、完全痛悔の困難さと必要性に触れるが、明らかにポオニー神父とシルモン神父を意識している。パスカルが『第十プロヴァンシアル』で、ポオニー神父とシルモン神父をキリスト教道徳にとって最も有害な作家として挙げる時念頭にあったのは、黎明期ポール・ロワヤルのサン・シランの思想にほかならない(学会発表)。

(8)痛悔論争はパスカルの他の思想にも影響を及ぼしている。塩川徹也氏は「賭の断章」について、情念の軛には気付いたものの、まだ罪を自覚的に悔い改める段階には至っていない聞き手の霊的状态は、まだ義化に至る愛ではないが、「ああ、この話を聞くと、われを忘れて恍惚となる」と叫ぶところから、既に愛徳(神への愛)の段階に達していると論じている。氏はここでフェヌロンの愛の体系を参照するが、悔い改めが問題とされており、ジャンセニウスの完全痛悔主義との関連で解釈すべきだろう。『アウグスティヌス』では、真の信仰は「神への愛徳の始まり」、つまり、完全だが、まだ不完全で小さく、地上の快樂に勝るだけの強さをもっていない愛徳と位置づけられる。これは、完全痛悔と不完全痛悔の間に質的な差(神への愛か、地獄への怖れに基づくか)ではなく、程度の差のみを認める完全痛悔主義の一つの帰結である(論文)。

(9)その他：失われた愛の著作の同定のほか、『頻繁な聖体拝領』についてのいくつかの研究--隠されたリシュリユ批判の射程、長大な前書きの意図、同時代のフランスにおける恩寵論争との関連、エディション比較、「ポール・ロワヤルの女性読者」トポス誕生--については調査・考察のみにとどまり、論文にまとめるまでには至らなかった。なお、この5年間の研究により、黎明期ポール・ロワヤルの中核は、当初考えていた三部作構想ではなくむしろ、三部作の一つで、執筆が1640年10月から1642年12月の長期間に及んだ『頻繁な聖体拝領』にあることを認識した。本作品についての研究を完結させることが今後の重要な課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

Yuka Mochizuki, «La conversion de la princesse de Guéméné et la genèse de *La Fréquente Communion* : spiritualité et

polémique», 『武蔵大学人文学会雑誌』第42巻第1号、2010年7月、p. 1-55 (査読なし)

Yuka Mochizuki, «Spiritualité de Port-Royal : grâce et pénitence», *XVIIe siècle*, n°248, 62e année, n°3, 2010, p. 479-489 (招待論文)

望月ゆか「Shiokawa Tetsuya, *Entre foi et raison : l'autorité. Études pascaliennes* (Paris, Honoré Champion, 2012)」、『フランス哲学・思想研究』第18号、2013年、p. 179-186 (招待書評論文)

望月ゆか「ボシュエ『ルーヴルの四旬節説教』をめぐる解釈の相克」、『武蔵大学人文学会雑誌』第46巻第1号、2014年7月、全11頁、印刷中(査読なし)

[学会発表](計 3 件)

Yuka Mochizuki, «Port-Royal, une nouvelle dévotion : Comment le molinisme peut entraîner la casuistique relâchée?», Journée d'études dix-septiémistes françaises au Japon : théâtre, poésie, philosophie, histoire des idées — à l'occasion de la parution du numéro spécial «Japon» de la revue *XVIIe siècle*— (2010年11月3日、於早稲田大学)

Yuka Mochizuki, «Avertissement moral envers Louis XIV ? : une autre lecture du *Carême du Louvre* de Bossuet»: Remarques sur la conférence de Christian Jouhaud, Directeur de recherche au CNRS, directeur d'études à l'E.H.E.S.S., «Ecritures de la misère au XVIIe siècle : littérature et témoignage» (2011年11月3日、武蔵大学総合研究所主催講演会ファシリテーターコメント：上記論文はこの仏語コメントの和訳に注を付したもの)

Yuka Mochizuki, «Une autre polémique sur la contrition : Saint-Cyran contre le P. Bauny», «Bayonne, berceau du jansénisme? Naissance et cristallisation du mouvement janséniste dans la société de son temps (1610-1643)»: Organisé à l'occasion du quatrième centenaire de la retraite de Cam de Prat (1612-1617) par la Société et Lettres de Bayonne avec le concours de la Ville de Bayonne (6, 7, 8 décembre 2012) (2012年12月6日、於バイヨンヌ[フランス])

6. 研究組織

(1)研究代表者

望月 ゆか(MOCHIZUKI YUKA)

武蔵大学・人文学部・ヨーロッパ文化学科・教授

研究者番号：30350226

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし